

仙台市の都市機能の変化

——仙台駅東口を中心として——

蓑田由佳

仙台市は、宮城県の中央東部、太平洋に面して位置する都市である。

緯度のわりに穏やかな気候や、自然に恵まれ落ち着いた風土などにより、古来『杜の都』と呼ばれ、また政治・文化その他の東北における一大中心地であり続けてきた。

もっとも仙台市の中心性は、東北地方各県でそれぞれまとまりがちな諸活動を、徹底的に広域ブロックレベルで把握するまでには至っておらず、首都圏の出先機関のベースキャンプ的役割を果たしている（支店経済）観がある。

人口は70万248人（昭和60年）、市域にドーナツ化現象が見られるが、周辺都市圏を含めて100万人に達する。

産業構成については、7割以上を第3次産業が占め、なかでも卸売業のウェイトの大きさは特徴的である。

昭和57年から60年にかけて、盛岡～大宮～上野と東北新幹線の乗り入れが実現し、仙台～上野間は約2時間の一日行動圏となった。

しかしそれによって、市場の拡大や情報量増加などのメリットのみならず、競争激化、顧客の流出、中央資本の圧迫などのデメリットも顕われ、仙台市は一層、高次の中枢管理都市へと成長する必要に迫られた。

東北新幹線の開業にあわせて、仙台市の都市基

盤整備は以前から進められていたが、都市機能をさらに十全に集積し、名実ともに広域ブロックの中核とならねば、仙台市は他の新幹線停車都市と相対して地位が低下し、また首都圏に吸収されて支店経済から脱することができなくなると思われる。

都市機能を向上させるための仙台市の開発プランは、

- 高次交通体系確立
- 都心部拡大・再開発
- サブ・コア設置による多核的开发
- 地域産業の振興
- 国際化

などに大別される。

このうち、将来の都心の一翼を担う地区として、現在土地区画整理・再開発事業が施工されている仙台駅東第一地区は、仙台港へ至る流通生産業務地帯へ直結する重要な位置を占めてもいるのであるが、その地区開発計画～整備された交通環境、職住近接・立体的集約的な土地利用、機能的な生活ゾーン配置～等に、仙台市の指向する将来像の一端がうかがえる。

現在は、仙台市がさらに高次の中枢管理都市へと変化してゆく過渡期であり、それが完了した後は、首都圏機能分散の受け皿としても、全国的な地位が浮上するであろうと思われる。

高岡市の工業

室谷三千世

富山県は呉羽丘陵により二分され、東を呉東、西を呉西と呼称される。高岡は呉西の中心であり、かつては富山市に匹敵するほどの勢力を持っていた。近年、人口の社会動態における流出者数が増加しており、人口は富山の31万2千人に対し

て、17万7千人（昭和60年）に止まっている。両市の通勤、通学圏を比較した場合も、富山市へは35市町村中20が含まれ、高岡市へは12市町村でしかない。つまり、富山市の影響はより広範に及び、しかも高い比率を示しているのに対し、高岡

市への通勤、通学者は数が少ないだけでなく比率も低い。

両市はともに城下町として出発した点では同じであるが、高岡は6年たつたないうちに廃城となり、衰微の危機にたたされた。にもかかわらず、こうして現在県内第2の都市として存続している理由は、高岡の軍事拠点としての地理的優位性に目をつけた藩が、高岡を残さんがために商工業の保護育成に努めたことにある。高岡はこうして北陸屈指の商工業都市へと生まれ変わった。富山市や金沢市と比べると、今日の高岡の商業機能は昔の面影がないほどの低下ぶりを示しているが、工業においては今日もなお、高岡市の基盤を安定させるだけのシェアの高さは持ち続けている。

高岡市の工業の発祥は、金屋町の鋳物業である。明治になると他の銅器産地が徐々に廃れていったのに対し、高岡は製品が日用品など大衆的な物が多く、安定した仏具需要という強みがあった上に、確固とした商業資本があって独自の流通体系を確立していたために、販路を拡大することさえ可能であった。昭和に入ってから、銅器の技術の上にアルミニウム工業が起り、戦時、戦後のアルミ製品需要の増大によって、高岡のアルミ加工業は活況を呈した。その後、順次数を増やし、現在では243社で産地を形成し、全国の約30%のシェアを占めるまでに成長している。分布状況を見ても、銅器業者とアルミ関連企業には一致する点が多く、アルミ工業が如何に銅器業と深くかかわって発展してきたかが知られる。

高岡の製造品出荷額の約70%を占める金属製品、化学、パルプ、紙、非鉄金属の4業種のうち、金属製品、非鉄金属はアルミ工業でそのほとんどを占められている。化学、パルプ、紙は小矢部川下流から河口にかけての地域に分布している大規模工場によるところが大きい。これらの電力指向型の金属、化学工業に代表される大企業と、銅器、漆器等の中小、零細企業の混合形態をとっていることに、高岡市工業の特色がある。ところで、昭和59年の出荷額の増加率は、県平均の4.6%を大きく下回る0.9%の伸びに止まっている。それはこれら4業種の伸びの相対的低さ、逆に全国的に高い伸びを達成した機械の比率が大変低いことが要因である。

さて、高岡の都市形成の過程は、第1期の鋳物業、漆器業の基礎が築かれた時期、第2期の伏木港周辺の工業地帯形成期、第3期の第2次大戦後～現在の工業都市としての成熟期、の3期に分けて考えられる。即ち、そもそも高岡が存続できたのが、上から商工業の保護振興が図られたためであり、その後も工業の発展を伴い、又工業の発展により都市として成長してきたといえるのである。従って、近年來の人口の社会動態での減少傾向、伏木港の地位の低下、通勤、通学圏における高岡の影響力の相対的低さ等で表わされる高岡市の都市的地位の低下は、従来高岡市の都市形成を助長してきた工業あるいは商業の停滞に原因を帰すことができると考えられる。高岡の採るべき道はこのことから自ずと明らかにされたと言わねばなるまい。

周辺都市八王子市の商業機能

—中心商店街の現状と展望を探る—

山崎 敦子

八王子市の商業は以前程、市内外に勢力を及ぼさなくなってきた。駅ビルの出店（昭和58年）によって、商店街の中心はますます駅寄りとなった他、61年には、広過ぎる商店街空間を来街者に回遊してもらう目的で、ショッピング・モールがつくられた。商業、強いては街全体の活気を取り戻そうと様々な試みが企画・実行されているが、八

王子の中心商店街は何か盛り上がり欠けている。何故だろうか。大都会東京の一周辺都市だからか。本論では、最初に八王子市の商業機能を総括的にとらえ、のちに中心商店街の現状と問題（駅ビルやモール化の影響など）を、他周辺都市と比較しながら探っていききたい。そして、今後の課題を自分なりに考えてみるつもりである。